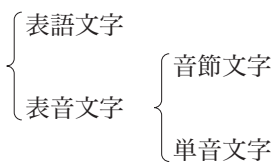


# 文字の分類とその歴史

## 1 文字の分類

世界の文字を分類すると、大きく表語文字と表音文字に分けられる。

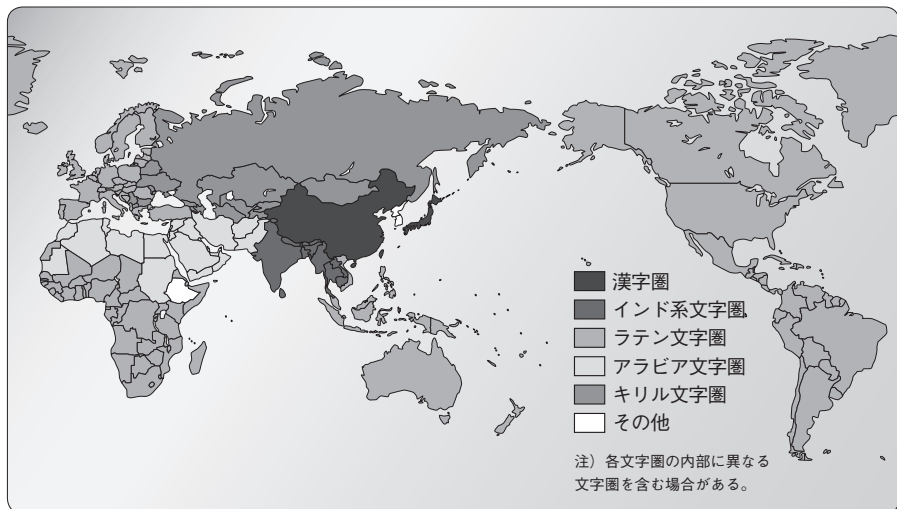


表語文字は表意文字とも呼ばれてきたが、その一つである漢字を例にすると、「一」「山」はそれぞれ意味（「一」は〈数の、ひとつ〉、「山」は〈地形の、

やま）を表すが、同時に音（「一」はイチ、「山」はサン）をも表している。すなわち、全体としては言語単位の上では語を表すものであることから、「表語文字」と名付けるのが適切である。

これに対して、表音文字は語の音だけを表すものをさし、それには音節を直接表すものと単音（音素）だけを表すものがある。日本語の平仮名・片仮名は前者の代表的なものであり、ローマ字や英語などのアルファベットは後者に相当する。ただし、アルファベットの場、語の単位で分かち書きされるのが一般的である。また、ハングル

図1-4 世界の主要文字圏概略図



【出典】河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（三省堂、2001）より

のように、単音文字であるが、音節相当で一定のまとまった形を構成するものも見られる（図1-4）。

## 2 文字の誕生と古代の文字

現在確認されている最古の文字は紀元前3500年頃にメソポタミアで用いられた楔形文字（シュメール文字）であるが、これは、エジプトのヒエログリフ、インダス文明の原インダス文字、中国の漢字（甲骨文字）や、マヤ文明のマヤ文字などとともに表語文字である。このことから、文字は表語文字を起源としていると認められる。

ただ、その楔形文字もすでに最古の資料において、表語文字の用法以外にも、音節を表す表音用法（漢字で言う

仮借）の用法が見られる。これは、ある語を表す文字をその語と同じ、または類似の音をもつ別の語にも用いる、いわゆる「当て字」の用法である。このように、表語文字が古くから音節、または音節の一部を表すという表音的用法をも兼ね備えていたことは注目される（図1-5）。

その際、楔形文字やヒエログリフなどでは、音形を借りると同時に、意味範疇を示す弁別的要素として限定符（Determinatives）を用いて記された。これは、漢字における、音を表す声符と、意味範疇を表す義符とからなる形声という構成原理と相通じる手法によるものである。

図1-5 楔形文字

シュメール文字はもと絵のような文字を尖った筆で線状に粘土板に書いていた。その後、筆先を切り取った尖った筆先で粘土板に押しつけて書くようになったため、角張った直線状の楔形の字形となり、原字を横に寝かせて書くようになった。その形状から楔形文字とも呼ばれる。

その文字構成法は象形から発生したが、物をかたどるという手法では動詞、副詞など、抽象的な意味を表す語を表すことはむずかしい。そこで、〈食べる〉という語は「顔」と「パン」を組み合わせて表す方法（漢字の会意）、〈小麦〉は音符 gig に、穀粒を意味する義符を添えて表す方法（漢字の形声）、〈太陽〉utu という文字は〈日〉ud、〈白い〉babbar、など隣接する意味の語にも転用する方法（漢字の転注）、などというように、漢字の六書と同じような構成法で用いられた。

【出典】河野六郎・千野栄一・西田龍雄『言語学大辞典 別巻 世界文字辞典』（三省堂、2001）より

	古拙文字	前2350年頃	アッシリア文字	補注
会意				ka「顔、口」とninda「パン」を会してkú「食べる」を表す。
指事				線の交叉によってkür「敵、他人の、別の」などを指す。
形声				ぐは意符で卵または穀粒、ぐは音符 gig、gig「小麦」を表す。
仮借				temen「土壘」の音価の一部の類似からte「近寄る」にも使用。
転注				原意utu「太陽」からud「日」、babbar「白い」、zagal「清い」その他に転用。